「石岡一色家文書」解題

基本情報

文書群名　石岡一色家文書
出所　　茨城県石岡市
点数　　1560 件 1607 点
年代　　文政七年（1824）～昭和三十五年（1960）

受入れの経緯

当文書群は、茨城県石岡市の一色家に伝来したものである。ダンボール箱 1・2 は、2013 年、茨城史料ネット（正式名称：茨城文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク）の活動によって救済された史料群であり、古書店購入分は、茨城大学図書館が古書店より購入した史料群である（かつて一色家が所蔵していた史料群の一部と見られるため、一括して扱う）。いずれも茨城史料ネットが史料整理を行い、所蔵者の意向により、茨城大学図書館に寄贈されることとなった。

一色家概要

一色家は、近江国（滋賀県）日野出身の近江商人である村田宗右衛門家の分家にあたる。初代村田宗右衛門は、文政十二年（1829）頃に常陸国府中（茨城県石岡市）へ移り住んで醸造業を始めたとされ、初代一色宗十郎は、二代村田宗右衛門の娘と結婚して婿養子となり、文久二年（1862）に分家を立てることを許されたという（古書店購入分 9-2）。一色家の当主は代々宗十郎を名乗り、屋号は本家である村田家同様「近江屋」、家印には「⌗」を用いた（ダンボール箱 1-178-81、ダンボール箱 1-72-3、ダンボール箱 1-73-1、ダンボール箱 1-74 など）。

一色家の醸造業は、明治四年（1871）十月に竹原宿の福田惣兵衛より酒造株 150 石を譲り受けたことから始まった（ダンボール箱 1-32-7、ダンボール箱 2-3-83-17）。石岡を拠点として水戸や助川（現日立市）などに分店を置き、明治二十年（1887）段階では酒・醤油の醸造・卸売業、酒・醤油・酢・薬・種物などの小売業、質屋経営などを行っていたことが確認できる（ダンボール箱 1-177-1～22）。明治三十八年（1905）には富士色合資会社を設立し、製造していた醤油「富士色」は、明治四十一年（1908）年の調査で茨城県内第九位の人気を誇る銘柄であった。本家村田家は、経営の悪化から明治三十年代には事業を畳んでいるが、「石岡一色家文書」を見る限り、一色家では少なくとも大正期頃までは醸造業を営んでいたようである。
※一色家の人物関係については下記「一色宗十郎について」及び系図を参照されたい。

「石岡一色家文書」概要

「石岡一色家文書」は明治期に作成されたものが大半を占めており、大別すると、①「金銭出入帳」などの商売・経営関係の帳簿類、②役所へ提出した願書や届、受給文書など各種書類、③金銭貸借証文、④品物代金や返済金等の受取証、⑤明治三十年代の鉄道・銀行の株式関係書類、⑥日記、⑦二代宗十郎の次男誠次郎と杉浦（小西）イトの婚約関係書類、⑧品評会関係書類、⑨私信等々が残されている。

一色家の商売・経営規模・取引先等を知る上で必要な史料はおおよそ揃っており、以下、特筆すべき史料について解説を加えておく。

②の書類の中には「営業免許鑑札書換願」など、明治二十年（1887）の初代一色宗十郎から二代宗十郎への代替わりに伴って作成された願書・届などの書類がまとまって残されており、明治中頃の一色家の商売・経営実態を探る上で有益な史料である（ダンボール箱 1-177-1～22、ダンボール箱 2-3-31-1～18 など）。

⑥の日記は三冊残されており、明治三十四～三十六年（1901～1903）分の記載がある（古書店購入分 18～20）。内容から二代宗十郎が記したと考えられ、もともとは離れの家作経過を記述することが主目的であったと見られるが、家作関係以外にその日の天気や出来事、宗十郎の趣味、商売関係の記載など多岐にわたっており、商業者の日記として興味深い史料である。

⑦は明治四十一年（1908）、二代宗十郎の次男誠次郎とコニカ（2003 年にミノルタと合併、現在のコニカミノルタ）創業者（六代）杉浦（小西）六右衛門の三女イトの婚約に関係する書簡・書類である（ダンボール箱 1-117、ダンボール箱 2-2-14、ダンボール箱 2-3-6・7・11～14・37～39・41～44・46・50～53・57・77～81 など）。当時、誠次郎は東京帝国大学工科大学（現東京大学工学部）に在学しており（ダンボール箱 2-3-82-1）、杉浦家では工学の素養がある人物を婿養子に望んでいた（ダンボール箱 2-3-13）。誠次郎が小西・一色の両家から期待されていたことが窺え、一色家の人脈や家族関係が分かる好史料である。

⑧は品評会・博覧会に製造醤油「富士色」などを出品するにあたって作成された書類で、明治後期・大正期における富士色合資会社の職員数・沿革・醸造高・製造法などを知ることができる好史料である（ダンボール箱 2-3-83-1～23 など）。

以上が「石岡一色家文書」の概略である。一色家が拠点とした石岡は、明治期には茨城県内最大の醸造の町として発展していくが、一色家は本家村田家とともにその一角を担った豪商である。そのため、「石岡一色家文書」は、現在石岡市教育委員会が管理している村田家の史・資料と合わせて、石岡の醸造業研究へ資するのは勿論のこと、幕末～明治期にかけての茨城県内の近江商人の活動実態を考究していく上でも非常に有用な文書群である。

一色家当主宗十郎について

一色家の当主が代々「宗十郎」を名乗ることは既述したが、「石岡一色家文書」には少なくとも三人の「宗十郎」が登場する。「石岡一色家文書」は、この三人の時代の史料が大半を占めており、「宗十郎」の名は頻出する。そのため、今後の研究の一助となるよう、三人の宗十郎について簡単な略伝を載せておく（その他の人物や系譜については別紙参照）。

①初代宗十郎（生没年：天保二年〈1831〉～明治二十年〈1887〉）

名は正安。生年は、没年から類推すると天保二年（1831）と考えられる（ダンボール箱 1-91、ダンボール箱 1-177-9）。嘉永五年（1852）に二代村田宗右衛門（文化四年〈1807〉～慶応元年〈1865〉）の娘志希（読みは「しげ」か）と結婚して婿養子になっている（古書店購入分 9-2）。二代村田宗右衛門の婿養子となった経緯は不明だが、初代一色宗十郎は、三代村田宗右衛門（文久二年〈1862〉～？）よりも十一歳年長であり、将来を憂いた二代村田宗右衛門が、三代村田宗右衛門が成人するまでの繋ぎの当主またはその後見役として一色宗十郎を婿養子とした可能性はある。その証拠に、文久二年（1862）には分家を許されて一色家として独自の経営を行いつつも村田家の経営も手助けしており、経営を顧みない三代村田宗右衛門をたびたび諫めている（ダンボール箱 2-3-36-4 など）。明治二十年（1887）五月二十九日に五十七歳で死去した。

②二代宗十郎（生没年：嘉永六年〈1853〉～1900 年代？）

名は、茂十郎。生年は、嘉永六年（1853）二月十一日（ダンボール箱 1-79）。明治二十年（1887）に実父初代宗十郎の死去により、宗十郎の名と家督を継承、実弟寅次郎（元治元年〈1887〉～明治 44 年〈1911〉・森昭治の養子となる）と協力しながら、一色家の商売経営・家政を取り仕切った。明治四十四年（1911）十月十四日の時点で、茂十郎・とその妻しまは死去していることが確認でき（ダンボール箱 2-3-82-1）、明治三十八年（1905）十月二十四日付の三男善三郎の書簡では長男胖が宗十郎と呼ばれていることから（ダンボール箱 1-181-9）、1900 年代に死去したとみられる。

③三代宗十郎（生没年：明治十三年〈1880〉～？）

名は、胖（ゆたか）。生年は、明治十三年（1880）六月十日。妻は、叔父森寅次郎の娘隆子。明治三十年代後半には彼が宗十郎を継承しており、実父二代宗十郎の死去に伴っての襲名とみられる。明治三十八年（1905）年に富士色合資会社を設立したときの一色家当主であり、各種品評会等に製造醤油銘柄「富士色」を出品し、高い評価を得ていた（ダンボール箱 2-3-83-1～23 など）。昭和十年代までは存命であったとみられる（ダンボール箱 2-3-82-3・5・8）。

※三代宗十郎の略伝については、『茨城人名辞書』にも掲載されているので合わせて参照されたい。

解題参考文献

弘文社編纂部編『茨城人名辞書』（昭和 5 年　弘文社）
『石岡市郷土資料 第三十一号　村田局長時代の石岡郵便局』（昭和 45 年　石岡史蹟保存会）
石岡市史編纂委員会編『石岡市史 上巻』（昭和 54 年　石岡市）
石岡市史編さん委員会編『石岡市史 中巻Ⅱ』（昭和 58 年　石岡市）
石岡市史編さん委員編『石岡市史 下巻（通史編）』（昭和 60 年　石岡市）
石岡市秘書広聴課編『広報石岡　№215』（平成 26 年）